

序文	なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から
----	---------------------------

はじめに

はじめに

張 雅*

本論集は、人類学研究所国際化推進事業(第5期)「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から」(2022～2024年度)に基づいて開催されたシンポジウム、講演会の成果を総括したものである。

この事業の目的は、アジア諸国、とりわけ中華圏の人類学者と日本の人類学・民俗学者との密接なネットワークを形成し、相互に協同することで、人類社会が直面する現代的諸問題に対して人類学はいかなる貢献を果たすことができるのかを模索することにある。現代社会は戦争や感染症、自然災害、テロ、気候変動などの深刻な国際問題に直面しており、多くの人々が故郷を離れて避難を強いられたり、自宅に閉じこもりたりすることを余儀なくされている。こうしたグローバルな課題について、人類学の研究者と共に議論を深め、歴史・経済・政治的な視点から国境を越えた人や物の移動の重要性を再考することが求められている。そのため、本事業では、具体的に「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同」というテーマのもと、ローカルなモノの生産や流通がグローバルな人や情報の往来へといかに展開し、他者とのネットワークがどのような形で構築されているのかという共通の課題を策定し、南山大学人類学研究所の所員と中華圏の研究者との間で対話を重ねることを目指すことであった。

南山大学人類学研究所の国際化推進事業(第5期)では、2022年12月3日に公開講演会「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」、2024年3月3日には「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」をテーマにした公開シンポジウム、2024年7月20日に「中国におけるプーアル茶の流通史と消費の現状」をテーマにした公開シンポジウム、2024年11月23日に公開講演会「越境者の E コマースを用いた購買行動から考え

る新しい領土」を実施した。

本論集は、これらシンポジウムおよび講演会のテーマに基づき、三部構成でまとめている。第一部は、「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」講演会と「越境者の E コマースを用いた購買行動から考える新しい領土」講演会(「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開—」シリーズ)の成果として、グローバル化と E コマースの拡大を背景に、商業集積地の発展をはじめ、物流網・運送技術の拡大と向上、消費者の消費行動、広告発信の変化を見据えながら、ひと・もの・情報の新たな展開と新しい統治のシステムによる領土の定義、境界などについて考察するものである。李瑞雪と王亦菲による共著論文は中国の浙江省義烏の5つの EC 村と1つの EC タウンを事例に、農村部の EC 村という産業集積地の形成と発展において、産業基盤の補助、政策の推進とインフラの整備、人材の確保など様々な要素が総合的に作用するメカニズムを検証している。調査地である義烏の EC 村には移住者が多く、なかでも起業家には比較的若く、かつ一流大学出身ではない者が多いという。彼らは重要な人材として EC 村のさらなる発展を推進し、また、EC 村の発展も彼らの人生を一変させたと言えよう。本論文では、越境 EC 市場の発展が商品の販売に関わる多様な職業の創出を促し、都市と農村の格差を縮小させるとともに、さらに地域の活性化の効果にも貢献したことが指摘される。

藤野陽平の論文は、グローバル化と E コマースの拡大を背景に、日本と台湾を行き来する人々の購買行動を事例として取り上げ、情報アクセスや配送時間、料金、言語の壁、地理的な距離などといった具体的な要素を分析することで、サイバーという新たな統治シス

* 大阪大学

テムによる領土の定義の再考を試みたものである。筆者は、異郷の地に足を踏み入れ、他者の営みを観察することを重視してきた人類学のフィールドワークが、コロナ禍以降オンラインという場でも展開されるようになったことに着目する。実際に現地へ赴くフィールドワークとオンライン調査の相違を問い直す中で、デジタルプラットフォームの浸透によって、人々がサイバー空間とリアル空間の両方で、国家とプラットフォームによる統治を受けつつも、それを自身の実践を通じて活用していることを指摘する。このように、国家の統治とビッグデータの囲い込みが避けられない状況において、利用者である私たちがデジタルサービスを活かしながら、アルゴリズムに操作されないために、いかなる工夫が必要なのか、重要な視点を提示してくれる。

第二部は、「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」公開シンポジウムの成果として、主に戦時中に南洋に移動した沖縄出身の女性たちや女性作家などに焦点を当てて、戦争とジェンダーの関係性の観点から、戦時中における日本の性別分業がどのように彼女たちの南洋体験に影響を与えていたのかを検討する。川島淳の論文は沖縄出身で南洋群島に移住した女性に注目し、彼女たちの渡航の目的、生業と活動などから沖縄出身の南洋移民女性たちの特徴について理解するための貴重な手がかりを提供してくれるものである。彼女たちは結婚、家族の呼び寄せ、国策による南進の動員などの様々な理由で南洋に渡ったが、戦時中に南洋群島の非常時体制が構築された後に、防災訓練や食糧増産に従事させられ、さらに高齢者や子供の引揚に同伴する役割を担わされていたことが明らかになった。戦時引揚に応じた女性たちのなかには、やむをえず家族が分断されて、沖縄で集団死に追い込まれる人もいたが、船舶の都合や個人の意思で南洋群島に残留している者もいた。しかし、どの選択肢においても、帝国日本の勢力の拡大と崩壊は彼女たちの人生に大きな波乱をもたらしたことは間違いないことが示される。

宮沢千尋の論文は、森三千代の『晴れ渡る仏印』に登場した二人のベトナム人女優、張鳳好と愛蓮の記述を分析し、森三千代のベトナム表象とベトナム女性に対する描き方を考察するものである。筆者は、森三千代が現地で会ったベトナム人の文学者は、植民地当局によって事前に選定され、フランス語での創作活動を行う人々がメインであったことを指摘する。その上で、

森三千代はフランスのフィルターを通してベトナムの文学を理解するため、フランス文学の指導が前提にあったことが窺われる。森三千代は、張鳳好の芝居ではベトナムの女性が儒教的環境で苦しむ姿が生々しく表現されていたことが高く評価されたことに対し、愛蓮の「西洋モノ」の劇は新鮮味はあるもののそれほど評価を得られなかったことを本論は考察する。筆者は、ベトナム地域研究の専門家として当時の仏印の出版状況を結びつけ、森三千代のベトナムに関する記述の限界と特色を示すことで、森三千代という作家を理解するための視点を提供する。

張雅の論文は、1940年代に南洋に徴用された女性作家に焦点を当て、派遣時期や服装、活動内容を通じて、女性作家に与えられた役割を明らかにする。特に、フィリピンに徴用された三宅艶子の『比島日記』と川上喜久子の『フィリピン回想』を取り上げ、女性作家の南洋経験が当時の性別分業によってどのようにジェンダー化されたのかを考察する。この分析を通じて、彼女たちが南洋で受けた厚遇の背後に存在している戦場のジェンダーの不平等性を解き明かす。

第三部は、「中国におけるプーアル茶の流通史と消費の現状」公開シンポジウムの成果として、主に歴史的な視点と現地調査に基づき、時代ごとの政治的・社会的な文脈の中で、茶とそれに関連する飲料の生産および消費の実態を考察する。張静紅の論文は、中国の深圳と潮州という二都市の若者の茶と関連する飲料の消費を通じて、若者の感覚と消費に関わる「品位」を社会的・文化的要素から分析するものである。同氏は、近年中国で若者に人気があるミルクティーの消費に注目し、その魅力の核心が「甘味」にあることを明らかにする。ミルクティーの「甘味」は、若者たちにひとときの安らぎとストレス解消の効果をもたらしているという。また、潮州は深圳に比べて地元意識が根強く、家庭で年長者とともに工夫茶（コンフーチャ）を飲む習慣があるため、潮州の若者には工夫茶、コーヒー、ミルクティーを組み合わせる取り入れるという「雑食」的な喫茶の特徴が見られるという。ただ、年長者が好む濃香型と異なり、潮州の若者は香り高い「清香型」の茶を好み、さらに味わいよりも見た目の美しさという視覚的要素を重視する傾向があるという点も、本論文で示される興味深い考察の一つである。

西川和孝の論文は、清末から民国初年にかけての普洱茶生産の要因を豊富な史料に基づき総合的に検証するものである。具体的には、普洱茶の栽培・加工技術

の向上、輸出手段の整備、対外貿易の拡大、新たな物流ルートの構築といった側面から分析を行う。本論文は、従来のハノイ経由での香港への輸出に関する議論を踏まえつつ、英領インド帝国との取引の視点を新たに加える。インド茶をチベットに輸出する過程で交通インフラが整備されたことにより、普洱茶もインド経由でチベットに流入し、その消費拡大に繋がった一方で、インド商人に価格決定権を譲ることとなり、さらに模倣品まで生み出されたという指摘は重要である。

講演会・シンポジウムの記録

公開講演会「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」（「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開—」シリーズ No. 1）

日 時：2022年12月3日（土）、13:30～15:00

会 場：南山大学 G27教室・オンライン（Zoom）

講 師：李瑞雪（法政大学）

使用言語：日本語

プログラム：

13:30-13:35 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所非常勤研究員）

13:35-14:35 李瑞雪（法政大学教授）講演「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」

14:35-14:45 コメント 張玉玲（南山大学人類学研究所／外国語学部アジア学科教授）

14:45-15:00 質疑応答

（司会）張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

公開シンポジウム「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」

日 時：2024年3月3日（日）、13:30～17:30

会 場：南山大学 G25教室・オンライン（Zoom）

プログラム：

13:30 開会挨拶

13:35-13:45 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

13:50-14:30 川島淳（沖縄国際大学非常勤講師）「沖縄出身南洋移民女性の生業と戦争—ジェンダーの視点から—」

14:35-15:15 大久保由理（東京大学特任研究員）「フィリピンで「大東亜共栄圏」建設を

目指した青年—ジェンダーの視点から日記を読み直す—」

15:20-16:00 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）「1940年代に南洋へ赴く男性作家と女性作家の役割について」

16:15-16:30 コメント 宮沢千尋（南山大学教授）

16:30-16:45 コメント 宮脇千絵（南山大学准教授）

16:45-17:30 質疑応答

（司会）張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

公開シンポジウム「中国におけるプーアル茶の流通史と消費の現状」

日 時：2024年7月20日（土）、14:00～17:00

会 場：南山大学 G23教室・オンライン（Zoom）

プログラム：

14:00-14:05 開会挨拶

14:05-14:15 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

14:15-14:55 西川和孝（明治大学准教授）「清代民国初期のプーアル茶の栽培と流通について」

15:00-16:00 張静紅（南方科技大学准教授）「越陈越香の发明：普洱茶在中国云南和大珠三角之间的流（茶を熟成させるという発明：中国雲南省と珠江デルタ地域で流通するプーアル茶）（通訳・袁夢）

16:15-16:30 コメント 王曉葵（南方科技大学教授）

16:30-17:00 質疑応答

（司会）張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

公開講演会「越境者のEコマースを用いた購買行動から考える新しい領土」（「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開—」シリーズ No. 2）

日 時：2024年11月23日（土）、15:00～17:15

会 場：南山大学 S65教室・オンライン（Zoom）

プログラム：

15:00～15:15 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

15:15～16:15 藤野陽平（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授）「越境者のEコマースを用いた購買行

動から考える新しい領土」

16:15～16:30 休憩

16:30～16:45 コメント 張玉玲（南山大学人類学
研究所／外国語学部教授）

16:45～17:15 質疑応答

（司会）宮脇千絵（南山大学人類学研究所准教授）

謝辞

本研究所の国際化推進事業の遂行にあたり、シンポジウムや講演会の開催をはじめ、この論集の刊行に至るまで、多くの方々にお世話になりました。ご登壇を快諾していただいた先生、コメンテーターを務めてくださった各先生、貴重な論考を寄せていただいた各先生、またさまざまな形で多大なご協力を賜った方々に厚くお礼申し上げます。